

# 京鹿子

平成二十六年七月一日発行  
通巻一〇七九号(毎月一回一日発行)

7月号

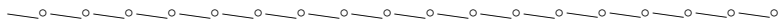
夏季吟旅特集号

豊 田 都 峰

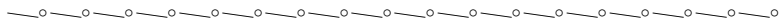
心響集 その七

惜 春 の 沖 よ り 波 紋 ふ た み す ぢ  
行 く 春 の 波 音 た め て 水 城 址  
引 く 波 の ま た ひ か り つ つ 春 の 逝 く  
逝 く 春 の 風 座 り ゐ る 湖 岸 ベ ン チ  
花 は 葉 に 水 城 門 址 の た ゆ た へ る  
花 水 木 向 三 軒 朝 の 風





遠山も晴天圏に茶摘唄  
尻上る畑はいくすぢ茶摘晴  
三日月の飾兜は伊達ごのみ  
竹葉散る午後はひとりの小道とす  
どこにでも座せば青葉のすぐつつむ  
山国は若葉青葉の大こだま  
春もやに浮くは鉾杉茅葺家  
茅葺の大きな月夜の水田べり



— 故 丸山佳子作品 —

# 墓

故  
丸山佳子

子 蜘蛛 ちる みな 金銀の糸ひいて  
墓 の 黙 ぶ かし 浮世のうたてさに  
墓 と みて ゆたかなこゝろ 何ゆゑか  
棒 で よ ける 墓 の 體 重 感 じ けり  
茗 荷 食 む 尼 の つ や ゝ か さ の 抜 け ず



# 秀華採集

病葉や指紋剥離といふ次第

鈴 鹿 けい子

青葉の頃に変色して散るのが「病葉」。虫害か条件が不都合な事での中のこと。「指紋剥離」はいわば個体識別不能とでも言える損失。この組合せは成功して  
いと評価。俳句は組合せがあるかぎり万能である。

海道忌捨て句供養の燭ひとつ

山 中 志津子

小さきもの雛と呼ぶと母の言ふ

田 渕 昌 子

「捨て句」は作家に取っては宝である。多い程勉強家。どんどん供養したらよい。指導への感謝がこもる。「雛」の実相をずばりと教えた母の一言は宝である、一つの基点になっているから。



— 近 詠 —

## 志賀たより

鈴鹿 仁

追分は風音ばかり絮たんぽぽ  
花は葉に本陣址の風の沙汰  
若葉風自在に吹かす草津宿  
大琵琶の島ごと抱く夏の雲  
もののふの弓矢を降ろし眠る春



近詠

## 浮島

和田 照海

浅蜷掘る灘の浮島より低く  
オルガンの間延びの唄や葱の花  
不忍の水やはらかき恋ボート  
青灘の通船かさね卒業す  
卒業子花アーチより乗船す



神麓集

さくらもち

藤岡紫水

翅閉ぢて風やりすぞす春の蝶  
身を反らすポプラの並木八十八夜寒  
想はでもよきこと日永のゆゑ想ふ  
飛花落花いま引き算の眞つ盛り  
かな文字で細く商ふさくらもち

鬱のかたまり

竹貫示虹

主なき赤きりボンの麥藁帽  
あの人も刻ももどらず夕焼空  
夏の夢出てゆく汽車の窓の妻  
山椒魚は鬱のかたまり動かざる

松田都青

風の研ぐ影みな尖り冴返る  
花はみな風葬と言ふ朧かな  
花の昼かくまで生きて何を得し  
広野焼く闇の厚さを火が縮め  
行く雲に後戻りなし春夕焼

無傷の空

北川孝子

小さき夢大きく育て花洛の忌  
来し方や昭和育ちの春ごろも  
惜春や無傷の空のひろがり  
鳥の恋木椅子に涙もろくみて  
五箇山にひびくこきりこ鳥交む

木蓮

丸井巴水

膨らみは天女を孕む紫木蓮  
神体は剣さくらの道の反り  
古刹抜け都をどりへ吸ひ込ま  
秘め事は無し木蓮の俯かず  
熟年の鬘肩さくらへ会ひにゆく

さくら

塩田朱千

京のさくら近江の桜沸騰す  
バスが泳ぎあふみの春鴨おどろかす  
山桜下りは一人のロープウェイ  
出世城かるがる泛べ花の雲  
手を洗ひ息をにごさず新樹の杜



夏季吟旅特別吟

豊田都峰

青葉づくし

白河の関守春を逝かしめず  
早苗田の限りは那須の山といふ  
風若葉那須の五岳のせり上ぐる  
風の棲むからまつ若葉峠みち  
みちのくは青葉づくしの風の中  
脇往還は春逝くすぢの大内宿

いくへなる青葉なだれに大内宿  
縄張りは佐幕の心風五月  
花シヤガの風をまとひて白虎墓碑  
風青葉隈無く藩校に満つ  
風薫る楷書に学ぶ士魂かな  
雪嶺は飯豊よ雲の光ゆく  
残雪嶺みちのくといふ空のもと  
磐梯は残雪三すぢの晴れ衣  
安達太良の智恵子の空は春逝く色



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

病葉や指紋剥離といふ次第

夕ざくら気はむらさきの淵に棲む

腐葉土の重ねはぬくい京ことば

白椿のちに汚点を残すとは

海道忌捨て句供養の燭ひとつ

鳥の恋生ひ立ち少し脚色し

囀りや鬨志宥めて掻き立てて

行く春のクラリネットを主流とす

小さきもの雛と呼ぶと母の言ふ

きりぎしの向かうからくる暖かさ

京都 鈴鹿けい子

電子機器に返事してゐる春の朝

白椿唯足るを知る手水鉢

蓮如忌や古刹は今も信徒守る

春塵の砂漠の町はレトロ調

春大根一人暮しも八年に

花大根祖国の想ひふつつと

春よこいオハイオ今も銀世界

名残雪無言で暫し眺めぬし

雪の道送迎バスの新入生

雪景色オハイオブルーの空やつと

京田辺 山中志津子

アリソナ 伊吹之博

オハイオ 水谷直子

高槻 田淵昌子

春泥や裏木戸までの三四歩

札幌〇 野村 鞆枝

お互ひに道ゆづりあふ春の泥

愛犬も主も共に春の泥

草野球それ球追ひて春の泥

解け切れぬ問題多く目借時

椿落つ庭暗くして家人無し

路の臺いつもの土手に主を待つ

山里のしだれ桜やまだ蒼

妹の早や旅立ちに淀の春

春の月足元あたりを優しくす

往き帰り春月を背に子等を訪ふ

選抜野球母校出場の春

神の島宿の戸口に親子鹿

喜寿の春妻つれ拝す校祖の碑

石鳥居潜れば微かに梅香る

梅咲きて隣家の庭に嬰兒の声

定置網遠目に伊豆の山笑ふ

梅まつり山を舞台に老妓舞ふ

雪解けの白き谿水宙を打つ

春雨の磯伝ひなり波を消し

佗助や言はずに思ふことの増ゆ

落椿幕開くまへの悲鳴かな

厄介な老いにもむかし桃の花

嘶きがいなきを呼ぶ白木蓮

放心の果ての景色のさくら道

少女いまパセリのやうな春休

原宿の蝶はまぶしき彩持てり

海見えるガラスの扉押せば初夏

噓や蝶ネクタイのドアボーイ

海弥生畏みて待つ日の出かな

春の星最終汽笛島を曳き

太閤の金の茶室に白椿

万愚節時には麒麟の目が欲しい

山桜満開うふふ足湯する

ハミングは花降る夜の指ぎつね

房総の籠を運ぶ一輛目

母の背を越え美少女の卒業す

路の臺香り閉ぢ込め天ぶらに

面影は幣のこぶしのくれなゐに

飼猫の病も癒ゆる春満月

もてなしは囀りのみに任せけり

葱ひと皮ふた皮剥きて旅ごころ

溜息ひとつ桜さくらの人となる

花辛夷ひかりひとひらづつ零す

佐々木紗知

布川 孝子

高野 春子

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

直江 裕子

千葉 伊藤 希眸

さいたま 神田 惣介

渋川 東 秋茄子

酒田 藤波 松山